

# 『シヴァターンダヴァ・ストートラ』和訳研究

畝 部 俊 也

## 1. はじめに

本稿は、ヒンドゥー教の主神の石柱、シヴァ神を主題とする讃歌 (stotra)<sup>1</sup>『シヴァターンダヴァ・ストートラ』(Śivatāṇḍava-stotra) を訳出し、解説を付すものである。このストートラはシヴァ神を讃える数多くの讃歌の中でも、もっとも人気が高いものの一つであり<sup>2</sup>、作者は、叙事詩『ラーマーヤナ』の敵役ラーヴァナであると伝説されてきた。ラーヴァナがシヴァ神を讃える讃歌を歌うに到るエピソードは、『ラーマーヤナ』第7巻のウッタラ・カーンダに組み込まれている<sup>3</sup>。そして、ラーヴァナの「カイラーサ山の持ち上げ」(Kailāsottarolana-mūrti)、またはシヴァ神の「ラーヴァナへの恩寵」(Rāvaṇānugraha-mūrti) と呼ばれるその情景は、インド国内のエローラ石窟などのみならず、遠くカンボジアのバンテアイ・スレイ寺院においても見事な浮き彫りとして図像化されている<sup>4</sup>。本稿ではストートラの訳出に先立ち、上記『ラーマーヤナ』の一節も訳出する。

なお、両テキストの翻訳は、2010 年度前期のインド文化学演習「ヒンドゥー神話研究」の成果であり、その下訳は当該授業に参加した学生諸氏によってなされたものである<sup>5</sup>。

<sup>1</sup> ストートラ文学はインドの宗教文献として一つの重要なジャンルを形成している。ストートラ文学の全体像やヒンドゥー教におけるその役割、これまでの研究などは、Gonda (1977, 233-70) が中世の宗教サンスクリット文学を扱うモノグラフにおいて一章を充てて詳細に論じているので、参照いただきたい。

<sup>2</sup> このストートラとの出会いは、1992年のインド、ブネー大学留学時に友人のMadhusūdhana Mīśra氏およびSadānanda Das氏が人気の高いストートラの一つとして朗唱してくれたことによる。現在ライプツィヒ大学で教鞭を執るSadānanda氏には、今回の訳出に当たっても難読箇所読解に関して有益な示唆をいただいた。両名に心より感謝を表します。

<sup>3</sup> このエピソードの概要は、すでに立川他 (1980, 95-6)、立川・大村 (2000, 70-1)、立川 (2008, 204-5) に美麗な図版とともに紹介されている。これらの一連の研究の基礎となっているRao (1968, 217-220) とともに是非参照いただきたい。

<sup>4</sup> 本稿末尾の図版1 (エローラ第29窟)、図版2 (バンテアイ・スレイ南経蔵破風) を参照のこと。それぞれのデータを提供していただきました佐久間留理子さん (東方研究会研究員)、前川実保さん (名古屋大学文学部4年) に、記して謝意を表します。

<sup>5</sup> 授業に出席して下訳を作成したのは、森下浩維、小西美代、進士貴世、落合彩香、佐々木和、園田奈津子、仲家有紀、前川実保、菊池政志、林愛弓、平部智愛、松浦峻也、山路奈奈の各氏である。

## 2. 『ラーマヤナ』 第7巻ウッタラ・カーンダ 第16サルガについて

『ラーマヤナ』 第7巻のウッタラ・カーンダ（最終巻）は、この大叙事詩の大団円を語るものであるが、第1巻とともに後補であると考えられており、主人公ラーマ王子自身の物語とは直接に関係しないエピソードを特に多く含んでいる<sup>6</sup>。冒頭から3分の1ほどは、敵役であるランカー島の王ラーヴァナ（Rāvaṇa）に関する多くのエピソードがまとめられており、以下に訳出する第16サルガは、ラーヴァナの名前の由来、いかにしてラーヴァナがシヴァ神の献信者（bhakta）となったか、なぜ『ラーマヤナ』においてラーヴァナはハヌマーンに率いられた猿軍に滅ぼされることになるのか、といったことを説明するものとなっている。訳出に際しては、いわゆるボンベイ本（Paṇṣīkar 1940, 995-7）を底本として用いた<sup>7</sup>。なお、翻訳の分節は内容を理解しやすくするための便宜的なものである。

## 3. 『ラーマヤナ』 7.16 訳と解説

### §1 停止するプシュパカ

1. ラーマよ、その羅刹族の王（ダシャグリーヴァ＝ラーヴァナ）は、兄ダナダ（クベーラ＝毘沙門天）を制圧し、マハーセーナ（カールティケーヤ＝スカンダ）の生誕地である、かの大いなる蘆原（śaravaṇa）に赴いた。
2. さて、ダシャグリーヴァは、まるで第二の太陽であるかのように光線の網に覆われ金色に輝く大いなる蘆原を見た。
3. 彼（ダシャグリーヴァ）が美しい森の中程の、ある山に登ると、そのときラーマよ、[彼がダナダから奪った輿] プシュパカがそこで止まったのを見るのであった。
4. 「この[プシュパカ]は[持ち主の]意のままに進むのではないのか。いったいどうして止まってしまっただけか」[と]、かの眷属たちによって囲まれた羅刹の王（ダシャグリーヴァ）は考えた。
5. 「なにゆえに、わしの意のままにこのプシュパカは動かぬのか。これは山の上にいる何者かの仕業であろう」[と]。
6. するとそのとき、ラーマよ、マリーチャという知恵すぐれたる[家臣]が言った。「王よ、プシュパカが動かない、というこのことに理由がないわけではありません。

<sup>6</sup> 岩本（1980, 258-9）。

<sup>7</sup> 他に *Rāmāyaṇaśiromani* および *Bhūṣana* という註を含んだ Mukhopadhyaya（1990, 2785-9）を参照した。紙幅の都合もあり、本稿にテキストは収録しなかったが、ボンベイ本に読みの面で特に問題とすべき点はないと思われる。注意すべきはパローダの Oriental Institute から出版された「批判版」（Shah 1975, 101-7）であり、岩本（1980, 232）が「曾て存在しなかった『ラーマヤナ』の一伝本を作り上げたに過ぎない」と評しているように、テキストとしては大変問題があり、当該箇所に関しては、まさに「校訂が機械的に過ぎたために文脈の断絶する」と指摘される通りであるといつてよいと思われる。本稿では翻訳のために利用することはしなかった。

7. さては、このプシュパカはダナダ以外の者の乗り物とはならないのでしょうか。だから、財宝の主（ダナダ）なしでは、動きを止めた [のでありましょう]。」

[解説] ウッタラ・カーンダ冒頭から、アガステイヤ仙がラーヴァナの行状について王子ラーマに説明する記述が続いている<sup>8</sup>。『ラーマヤナ』第7巻第9サルガの記述によれば、ヴィシュラヴァス仙（Viśravas）は、誕生した我が子が十の頭を持つのを見て、「ダシャグリーヴァ（十の首を持つ者）」と名付けたとされる。この第16サルガのテーマの一つは、このダシャグリーヴァがなぜ「ラーヴァナ」と呼ばれるようになったかを説明することであり、その名が与えられる本章の終盤までは「ラーヴァナ」でなく「ダシャグリーヴァ」、「ダシャーナナ」という名前で呼ばれている。

第2偈で「金色に輝く大いなる蘆原」と謳われるカイラーサ山の麓にあるマーナサ湖周辺は財宝神ダナダ（クベーラ＝毘沙門天 *Vaiśravaṇa*）の治める地であった。カイラーサ山はシヴァ神の治める地（あるいはシヴァ神そのもの）であるため、シヴァ・パールヴァティー両神の息子、軍臣スカンダもそこで誕生したとされる。ダナダとラーヴァナは父を同じくする腹違いの兄弟なのであるが、ラーヴァナはダナダを倒し、彼の持つ輿プシュパカも我がものとする。プシュパカとは、持ち主の意図を感知して動く魔法の輿（あるいは「空飛ぶ宮殿」）で、ラーマによるランカー島制圧後はラーマの乗り物となるため『ラーマヤナ』本篇を通して登場している。

ラーヴァナはそのプシュパカに乗ってカイラーサ山を目指す、登りはじめるとプシュパカは停止してしまう。彼は、彼の6人の重臣のうちの一人マーリーチャとともにその突然の停止を訝しむのであった。

## §2 ナンディンの警告

8. 以上の彼の発言の間に、恐ろしげで、暗黄色で、矮小にして、異形、禿頭であり、腕短く、剛力であるナンディンが [現れた]。
9. そして、バヴァ（シヴァ）の家来であるナンディーシュヴァラ（ナンディン）は、傍らまでやって来て、恐れることなく羅刹族の王（ダシャグリーヴァ）にこの言葉を語った。
10. 「立ち去れ、ダシャグリーヴァよ。山の上でシャンカラ（シヴァ）がお戯れである。鳥・蛇・夜叉・神・ガンダルヴァ・羅刹たちにとって、
11. [すなわち] まさに一切の生類にとって、山は立ち入れないものとなっている」、というナンディンの言葉を聞いて、[ダシャグリーヴァの] 耳飾りは怒りによって震えた。
12. [ナンディンからこの警告を受けた] けれども、怒りによって目を赤くした彼（ダシャグリーヴァ）はプシュパカから降り、「そのシャンカラとはいったい何奴だ」と言って、山のふもとに近づいた。
13. 彼はそこに、第二のシャンカラであるかのように輝く [三叉] 戟を支えて、[シヴァ] 神から遠くないところに立つナンディンを見た。

<sup>8</sup> ウッタラ・カーンダ全体の流れについては、Shastri（1959）の翻訳参照。

14. その羅刹族の者（ダシャグリーヴァ）は猿の顔をした彼を見て侮り、水を保つ雲が〔雷を放つ〕ように、高笑いを放った。

〔解説〕シヴァの眷属でナンディンという名でよく知られているのは、彼の乗り物である雄牛であるが、カイラーサの番人である猿面の従者も同じ名前と呼ばれる<sup>9</sup>。このナンディンからカイラーサ山はシヴァ神が妃と戯れているため通行できない、ということを知ったラーヴァナは激怒し、ナンディンを嘲るのであった。なお、エローラ第29窟南入口左壁などの彫刻によれば、シヴァとパールヴァティーが興じていたのはサイコロ遊びである<sup>10</sup>。

### §3 ラーヴァナが猿族に滅ぼされることになる因縁

15. シャンカラ（シヴァ）の別体であり、そこ（カイラーサ山の麓）の番人である尊者ナンディンは、彼に腹を立て、近づいてきた十面の者（ダシャーナナ＝ダシャグリーヴァ）にそこで言った。
16. 「ダシャーナナよ、〔お前は〕猿の姿をした私を侮り、落雷にも似た嘲り笑いを放ったから、
17. それゆえに、私の勇気を備え、私の姿と、私同様の熱情を持つ猿たちが、実にお前の一党の殺害のために生まれてくるであろう。
18. 残酷な者（ダシャグリーヴァ）よ、爪や牙を武器とし、心のようにすばやく動き<sup>11</sup>、戦いに酔いしれ、力勝り、山々のように広がる、
19. 彼ら（猿たち）は、お前や、家来および息子の持つ、様々な強さや自尊心や崇高さを、まとめて取り去るであろう。
20. おお、夜動く者（ダシャグリーヴァ）よ、今私はお前を殺すことができるけれども、〔お前は今〕殺されるべきではないのだ。というのは、自らの諸行為（カルマ）によってお前はまさに既に殺されているのだから。」
21. という言葉を発したその偉大な神（ナンディン）の上に、諸々の神の太鼓が鳴り、そして花の雨が空から降り注いだ。

〔解説〕『ラーマーヤナ』本篇でラーヴァナは、ハヌマーンを頭領とする猿軍の助力を得たラーマ王子に倒されることになる。ここで語られているのは、羅刹の王たるラーヴァナがなぜ猿族に滅ぼされなければならなかったか、というその因縁である。ラーヴァナは「シヴァの別体」とされる猿面の従者ナンディンを侮辱したという自らの行為によって、将来猿族に滅ぼされることにな

<sup>9</sup> Rao (1968, 455-60) 参照。立川 (2008, 170) によれば、リング、三叉戟、牛（ナンディン）の彫像がクシャーン朝後期にはシヴァのシンボルとして用いられるようになるのであるが、第34偈に「雄牛を旗印とするもの」というフレーズは見られるものの、今回扱う文献ではこの三者はいずれも明確には描写されない。

<sup>10</sup> 立川・大村 (2000, 70). サイコロ遊びのための盤 (śāripatta) が遺跡床面に刻まれているとのことである。立川・大村 (2002, 72-7) の解説も参照されたい。

<sup>11</sup> インド哲学文献では、ヨーガにおける精神集中を妨げる心の動きはしばしば猿に喩えられる。あちらこちらに飛び回り落ち着かない心を猿に喩えるわけであるが、ここでは逆に動きの速い猿を心に喩えているのである。

るのである。

#### §4 カイラーサ山に押し込められるラーヴァナ

22. そのとき、大きな力を持ったかのダシャーナナは、ナンディンの言葉を気にとめずに、山に近づき、[次の] 言葉を語った。
23. 「私が進んでいるのに、プシュパカの進行が途切れたのはどういうわけだ。お前のこの山を根こそぎにしてやるぞ、牛飼（シヴァ）よ。
24. 何の権限があって、バヴァ（シヴァ）は王侯のようにずっと戯れているのか。知るべき恐怖の原因が近づいているのに、奴は知らないのだ。」
25. こう言った後に、ラーマよ、[ダシャグリーヴァは] 山に多くの腕を伸ばし、それを素早く持ち上げたのであった。その山は震動した。
26. まさに山の震動により、神（シヴァ）の眷属たちは震動した。パールヴァティーもまた揺れ、そのとき、偉大な神（シヴァ）にしがみついた。
27. すると、ラーマよ、神々の中で最高位にある偉大な神、ハラ（シヴァ）は、足の親指でその山を戯れに押したのであった。
28. すると、彼（ダシャグリーヴァ）の、山の柱に比すべき多くの腕は押し潰された。そこでその羅刹の家来たちは驚愕した。
29. 怒りゆえに、また、諸々の腕の痛みゆえに、その羅刹（ダシャグリーヴァ）により、それによって三界が震えるほどの叫び声（virāva）が突如放たれた。
30. 彼の家臣たちは、ユガ末（世界の終わり）における雷撃だと思った。そのとき、インドラを先頭とする神々[でさえ]、道々でよろめいた。
31. 海々もたぎり、また、山々も震えた。[ヒマラーヤに住むという] ヴィドヤーダラ（持明族）やシッダ（成就者）たちが、「これはどうしたことか」と言うほどに。

[解説] エローラ石窟カイラーサナータ寺院など、多くの石窟寺院に彫刻されるのは、この一節が描写する情景である。エローラ第 29 窟（図版 1）のように、片足を降ろして岩山にラーヴァナを閉じこめ、手では寄り添うパールヴァティー妃を優しく支えるシヴァの像が、エローラにはほぼ同様の形でいくつもの窟で彫刻されている<sup>12</sup>。また、カンボジアのバンテアイ・スレイ寺院の

<sup>12</sup> 立川他（図版 85-9）に示されるように、エローラだけで 5 例も確認できる。他地域の同種の彫像に関する分析は、Kala（1988, 36-42; Fig. 32,33）を参照。図版には南インド（カルナータカ州）の作例が示されているが、エローラなどのものに比べ、シヴァ・パールヴァティーではなく、ラーヴァナの方がかなり大きく彫刻されている。また、エレファンタ島の作例に関しては Berkson et. al（1983, 34; Pl. 70）参照。同島の石窟寺院の様々な彫刻の主題はシヴァの諸相であり、以下に見る『シヴァターナダヴァ・ストートラ』に言及されるシヴァの様々な姿を理解するためにも同書は有益である。シヴァの諸相の全体像については、立川・大村（2002, 71-104）のカラー図版付きの解説も参照いただきたい。

南經藏破風のレリーフ（図版 2）も大変有名である<sup>13</sup>。中心となる三者はもちろん、山の麓の虎や象といった動物から山上の髭を生やしたシッダ（成就者）達の姿まで大変丁寧に彫刻されている。

#### §5 「ラーヴァナ」という名の由来

32. 「偉大な神、青い頸を持つウマー（パールヴァティー）の夫（シヴァ）を鎮めて下さい。ダシャーナナ様、彼を措いては、他の避難所（śaraṇa）をこの「世界」に私たちが見ることはありません。
33. 讃辞によって敬意を示す者となって、まさに彼という避難所に赴いて下さい。憐れみ深いシャンカラ（シヴァ）は鎮まり、あなたのために恩寵を配するであります。」
34. そのときこのように家臣たちによって言われて、かのダシャーナナは、雄牛を旗印とする者（シヴァ）を様々な種類の詠唱や讃歌によって礼拝し、讃えたのであった。しかし、嘆く羅刹（ダシャーナナ）に千年が過ぎ去った。
35. それによって、力強い偉大な神（シヴァ）は、山の頂上に固定された「ダシャーナナ」に満足した。そして、彼の諸々の腕を自由にして、ラーマよ、ダシャーナナに「次のような」言葉を語った。
36. 「ダシャーナナよ、私は勇者たるお前の高潔さゆえに満足である。山に押し潰されたお前により放たれた、大変恐ろしげな叫び声（rāva）と、
37. そして、[その声の] 響き渡った（rāvita）この三界が恐怖に到ったことにより、王よ、お前はまさにラーヴァナ（Rāvaṇa）という名となるであろう。
38. 神々、人々、夜叉達、そして地上にいるその他の者達は、お前を「世界を叫ばせる者」（Loka-rāvaṇa）、「ラーヴァナ」とこのように呼ぶであろう。」
39. プラスティ仙の子孫（ダシャグリーヴァ改めラーヴァナ）よ、お前が望む道にて自由に立ち去れ。他ならぬ私によって許されたのだ。羅刹族の王よ、どうぞ行くがよい。」

[解説] この節に明示されるように、ラーヴァナはシヴァを鎮めるため 1000 年にわたって彼を讃える様々な讃歌を歌い続けたとされている。そして、“Rāvaṇa” という名前に関し、動詞語根 √ru（叫ぶ）に基づく 2 種の語源説明、すなわち、彼が苦痛の余り上げた叫び声（rāva）に由来するという語源説明と、その声を響き渡らせたこと（rāvita）により世界が慄いたことに由来するという語源説明とがなされている。

#### §6 シヴァによる恩寵とその後のラーヴァナ

40. しかし、このようにシャンブ（シヴァ）に言われて、ランカー島の王（ラーヴァナ）は自ら言った。「偉大なる神よ、もしも満足されたのでしたら、請うている私に恩恵をお与えください。
41. 神、ガンダルヴァ、悪魔たち、および、羅刹族の者たち、秘密者たち、蛇族たちによっては、また、他のより強い者たちによって「さえ」殺されえない性質が私によってすでに得られておりま

<sup>13</sup> カンボジアの他の作例については Giteau (1967-68) 参照。



す。

42. 人間たちを数には入れません、神（シヴァ）よ。[というのも、] 彼らは私にとって取るに足りないものと考えられる [からです]。そして、私には、梵天から長い寿命がすでに得られています。三都城を滅ぼす者（シヴァ）よ、[私が] 望んでいる、寿命の残り武器とを、あなたは私にお与え下さい。」
43. すると、そのラーヴァナによってこのように言われたかのシャンカラ（シヴァ）は、「月の笑み」（candrahāsa）として名高い光輝く剣を与えた。そして、そのときに、生類の主（シヴァ）<sup>14</sup> は寿命の残りをも与えた。
44. 与えると、その後シャンブ（シヴァ）は、「この [剣] はお前によって軽んじられてはならない。というのは、もし軽んじられることがあるならば、他ならぬ私 [のところ] に疑うことをしない [その剣] は戻ってくるであろうから。」[と] 述べた。
45. このようにして、まさに大主宰神（シヴァ）によってつくられた名前を持つかのラーヴァナは、偉大なる神（シヴァ）に挨拶をすると、プシュパカに乗りこんだのであった。
46. その後、ラーマよ、ラーヴァナは地表を征服していった。たいへん大きな勇気を持つ武人（クシャトリヤ）たちを次から次へと倒しつつ。
47. ある者たちは力強い勇者で、戦いにひどく熱心な武人であったが、彼（ラーヴァナ）の命令に従わず、従者たちともども滅亡した。
48. 他の知恵を備えた者たちは、羅刹（ラーヴァナ）が打ち負かし難いことを知って、「我々は征服されました」と [その] 力を誇る羅刹族の者に話しかけた。

[解説] 前々節でみたような形で図像化されるシヴァの姿は、通常「ラーヴァナへの恩寵相」と呼ばれる。シヴァはラーヴァナの無礼を許すのみならず、1000年の間自分を讃えたラーヴァナに満足し、梵天から与えられていた彼の寿命の残りを奪うことなく彼に返し、また武器をも与えるのである。シヴァが与えた武器は「月の笑み」と呼ばれているが、この名によってラーヴァナの武器が（微笑みを浮かべた口のような形の）半月刀であることが説明されている。

シヴァに許され恩寵を授かったラーヴァナは、以降各地を平定していくことになるが、第42偈で「人間はものの数ではない」と語っている。しかし、この慢心こそが、人間であるラーマ王子によって最終的に倒されることになる因縁に他ならないのである。

以上で、ラーヴァナが『シヴァターナダヴァ・ストートラ』を詠い、シヴァ神のバクタになるに到った経緯について述べる『ラーマヤナ』の一節は終わる。

<sup>14</sup> 「生類の主」とここで訳出したのは“bhūta-pati”という語であるが、“bhūta”には「幽鬼」、「物怪」といったような意味もある。注21参照。

#### 4. 『シヴァターンダヴァ・ストートラ』について

上に訳出した『ラーマヤナ』に語られるように、『シヴァターンダヴァ・ストートラ』は、伝統的にはラーヴァナがシヴァ神の怒りを鎮めるために1000年に渡って詠った讃歌のうちの一つであるとされ、作者もラーヴァナ自身と考えられている。同ストートラは一頌の中に同類音を何度も反復し、また一行32音節に全体に渡る複合語の使用さえも珍しくないほど、長大な複合語を多用する特徴的な文体で著されている。Pañcacāmara という短音・長音を16×4音節にわたって単純に反復するだけのシンプルかつ重厚で力強い韻律<sup>15</sup>と相俟って、聞く者にたいへん強烈な印象を残すものとなっている。現在のインドでも大変人気の高いストートラであり、インターネット上からも多くの翻訳や朗唱した音源、映像等が入手可能である。音源、映像に関して例を挙げるなら、マハーラーシュトラ州出身の歌手、シュルティ・サドリールカルの素晴らしい歌詠 (*Bhaktimala: Shiva*, Vol. 1, Music Today CD D92003, 1991 所収) やよく知られたテレビシリーズの『ラーマヤナ』中での映像化 (*Ramanand Sagar's Ramayan*, DVD Disc 7, Episode 30, 2001 所収) は、本稿作成にあたっても参考とした。

本ストートラのタイトルの意味するところは、「シヴァ神のターンダヴァ舞踊の讃歌」であるが、ストートラ中ターンダヴァ舞踊に言及する箇所は第1、11頌のみである。このストートラは他のプラーナに語られるような様々なシヴァ神のエピソードに言及するが、「ターンダヴァ」と呼ばれる忿怒相のシヴァの舞踊<sup>16</sup>の因縁を語るエピソードを直接題材としているわけではない。シヴァ神のターンダヴァ舞踊を想起させるのは歌詞の内容よりも、むしろそのリズムと旋律であり、本稿で再現できないその点については、上記の音楽・映像資料等を是非参照いただきたい。

本ストートラに関しては上記のように多くの翻訳が存在しているし、また内容面の解説や美術面に関係する言及はいくつかなされてきた<sup>17</sup>。ただし、本格的な文献学的研究は未だなされておらず、上述のように特異な文体で書かれ、内容的にも難解な箇所が多いため、Pandey (1997) 他、入手できる翻訳も趣意的なものである。本稿でも十分意を尽くした翻訳はできなかったが、足ら

<sup>15</sup> この韻律は1バーダ16音節という長さを持っており、ちょうどシュローカの倍である。短音・長音のセットを単純に8度繰り返すもので、

jaṭā   ṭavī   galaj   jalap   ravā   hapā   vitas   thale  
 ~ ~   ~ ~   ~ ~   ~ ~   ~ ~   ~ ~   ~ ~   ~ ~

というような、プリミティブで力強いシャッフルのリズムになる。マートラ数を基準に日本語での再現を試みるならば、3音からなる句を8回繰り返せばよいであろう。試みに韻律を考慮に入れて第一頌を訳出しておく。

卷毛の森  落ちる水の  流れ清む  地なる首に  
           花輪のごと  垂れし蛇を  掛けしかの主  踊りたもう  
 「ダマッ、ダマッ、ダマッ、ダマッ」  鼓響く  猛き舞踏  
           そなるシヴァは  願うらくは  我らに幸  恵み賜え

<sup>16</sup> 「ターンダヴァ」については第11頌の解説および注49を参照のこと。

<sup>17</sup> 本文を直接取り上げて注解する研究としてはAgrawala (1960) がある。必ずしも文献的な根拠が明確に挙げられているわけではないが、思想的な面も読み込んだ興味深い解釈が見られる。



ざるを補うために解説を付すこととする。

訳出のためのテキストとして、本稿では、現代のヒンドゥー社会においても日常的に用いられるサンスクリットの讃歌類をヒンディー語訳、英訳とともに集成した Pandey (1997) に所収のテキスト (STp) を底本とした。Bhaktimala CD シリーズの歌本として出版された Music Today (1992) 所収のテキストは細かな誤植と思われるものを除きこれとほとんど全同である。これらの現在流布しているバージョン以外のものとして、ニルナヤサーガラ・プレスより 1912 年に刊行されたストートラ集成 *Bṛhatstotraratnākara* に収められたもの (STj) を入手することができたが、これは冒頭の 1 頌を欠く 14 頌で構成されており、読みもかなり異なっている。無理に校合するのではなく、上記と比較して異読がある場合は参考のため注記することとした。

なお、本ストートラでは、あまりに長大な複合語が使用されているため、通常のローマ字転写法にしたがって転写すると非常に読みにくくなってしまう。以下に挙げたテキストでは不整合、不徹底ではあるが、通常の慣例と異なり、固有名詞およびそれに準ずると考えられるものを除いて、複合語を構成する単語の間にハイフンを入れている。なお、母音のサンディを解除すると韻律を破壊してしまうため、元々が 1 つの母音であったことがわかるように分解した音の上に記号を付しておいた。また、以下の翻訳では解説を付す為いくつかの節に区切っているが、必ずしも内容的にはっきりと主題が分けられるわけではないので、分節は便宜的なものに過ぎない。

## 5. 『シヴァターナダヴァ・ストートラ』 訳と解説

### §1 シヴァ神の姿

jaṭā-āṭavī-galaj-jala-pravāha-pāvita-sthale  
gale 'valambya lambitām bhujaṅga-tuṅga-mālikām |  
ḍamaḍ-ḍamaḍ-ḍamaḍ-ḍaman-ninādavaḍ-ḍamarv ayaṃ  
cakāra caṇḍa-tāṇḍavaṃ tanotu naḥ śivaḥ śivam || 1||

1. 巻髪は森より落ちる水の流れによって清められた土地である喉頭に、垂れ下がった大きな花輪のようなコブラを懸けて、「ダマッド、ダマッド、ダマッド」という音のする太鼓を伴う、猛々しい舞踊 (tāṇḍava) をかの方は行った。[その] シヴァ神は我々に幸せ (śiva) を恵みたまえ。

jaṭā-kaṭāha-saṃbhrama-bhraman-nilimpanirjharī-  
vilola-vīci-vallārī-virājamāna-mūrdhani<sup>18</sup> |  
dhagad-dhagad-dhagaj-jvalal-lalāṭa-paṭṭa-pāvake  
kiśora-candra-śekhara ratiḥ prati-kṣaṇaṃ mama || 2||

2. 鉢状の巻髪に渦を巻き彷徨う神聖な河 (nilimpanirjharī: ガンガー) のうねる波の分岐に輝く頭を持ち、「ダガッド、ダガッド、ダガッド」と燃える額の表面に炎を備え、細い月を頭飾りとする者

<sup>18</sup> STp の mūrdhani を STj により修正。

(シヴァ神) に対し、毎瞬毎瞬、私の熱情がある。

[解説] この二つの頌では 1. 長い巻髪であること、2. 喉頭にコブラを懸けていること、3. ダマル太鼓を持っていること、4. ガンジス河の女神（ガンガー女神）および 5. 細い三日月を頭飾りとしていること、6. 額に第三の目を持つこと、というシヴァ神の容姿がまず讃えられている。これらの特徴はどのようなシヴァ神の図像でも必ずその構成要素としているもの（図版 3）であって、本ストートラでも表現を変えて繰り返し言及されている。「ダマッド、ダマッド」というダマル太鼓の音を表す擬音語、炎のメラメラ燃え上がる様子を表す「ダガッド、ダガッド」という擬態語が用いられ、ストートラに強い響きを与えている。シヴァ神はカイラーサ山そのものとも見なされるため、ガンジス川の女神を頭頂に飾るシヴァ神の首もとまでの様子が、山頂からの清流に清められる下流の土地になぞらえられている。

## §2 パールヴァティー妃を伴うシヴァ神

dhārādharendra-nandinī-vilāsa-bandhu-bandhura-  
sphurad-dig-anta-santati-pramodamāna-mānase |  
kṛpā-kaṭa-ākṣa-dhoraṇī-niruddha-durdhara-āpadi  
kvacid dig-ambare<sup>19</sup> mano vinodam etu vastuni || 3||

3. 山の王 (dhārādharendra: ヒマラーヤ) の娘 (パールヴァティー妃) と美しい遊び仲間と [に比される] 山並みの、輝く四方位の果てまでの連続 (稜線) を喜ぶ御心 (mānasa) を持ち、慈悲の一瞥 (kaṭākṣa) の持続によって耐え難い苦難を制した、四方位を衣とする存在 (vastu) [であるシヴァ神] において、心が喜びに赴きますように。

jatā-bhujaṅga-piṅgala-sphurat-phaṇā-maṇi-prabhā-  
kadamba-kunkuma-drava-pralīpta-dig-vadhū-mukhe |  
mada-āndha-sindhura-sphurat-tvag-uttarīya-medure  
mano vinodam adbhutaṃ bibhartu bhūta-bhartari || 4||

4. 巻髪のコブラの赤茶に輝く襟の珠の輝きによって、カダンバとクンクマの液<sup>20</sup> に染められたように [四方の] 天空の乙女たち (dig-vadhū) の顔を [黄色や赤色に染め]、盲いた酔象の輝く肌を滑らかな上衣とする生類の主 (シヴァ神)<sup>21</sup> において、心は喜びを保ちますように。

<sup>19</sup> STj: cid-ambare

<sup>20</sup> カダンバは黄色い小さな花よりなる花房が球形になるという特徴がある花である。クンクマはサフランのことで、花は薄紫色だが花柱が赤く、その赤い粉が化粧品として用いられる。

<sup>21</sup> 注 14 参照。ターンダヴァという舞踊は様々な鬼神等とともに踊る怖ろしげな踊り (立川他 1980, 106) であるので、ここの“bhūta-bharti”には「幽鬼の主」という意味も込められているものと思われる。

[解説] この両頌は難解である<sup>22</sup>が、全体としてカイラーサ山とその麓のマーナサ湖を取り囲む雪に覆われた山々と、朝焼け夕焼けに染まる空よりなる美しい情景が、シヴァ神およびその妃パールヴァティーとその取り巻きの様子として詠われているものと思われる。上で翻訳した通り、字義の上では両頌にはカイラーサ山にもマーナサ湖にも直接的な言及はない。しかし、全空間を衣とするシヴァとその心（*mānasa*）を意味する詩文が喚起するイメージは同時に天空に屹立するカイラーサ山とその前に広がるマーナサ湖周辺の情景でもあるであろう。また、「山の娘」を意味するパールヴァティーは、雪山ヒマーラヤ（*Himavat*）の娘であると考えられている<sup>23</sup>。シヴァ神は首だけでなく、その頭にもコブラが巻き付いており（図版3）、その平らに広がるえりの部分には *phaṇā-maṇi* と呼ばれる宝石があるとされる。空が黄や赤に染まるのは、カイラーサ山であるシヴァの頭を飾るコブラのえりの宝石の輝きによる、と謳っているわけである。象の皮を纏うシヴァは、ターンダヴァ舞踊の神話と関連しており、この後も繰り返し言及される。

### §3 シヴァ神とインドラおよびカーマ

*sahasralocana-prabhṛty-aśeṣa-lekha-śekhara-  
prasūna-dhūli-dhoraṇī-vidhūsara-āṅghri-pīṭha-bhūḥ |  
bhujāṅga-rāja-mālayā nibaddha-jāṭa-jūṭakaḥ  
śriyai cirāya jāyatām cakorabandhu-śekharaḥ || 5||*

5. [頂礼する] 千眼の者（*sahasralocana*: 帝釈天インドラ）をはじめとする全ての神々の冠から[落ちる] 花卉と花粉の連続によって色づけられる足の置き場を持つ者であり、コブラの王でできた花輪によって、もつれた髪（*jāṭa-jūṭa*）を結ぶ者であり、チャコーラ鳥の友（*cakorabandhu*: 月）<sup>24</sup>を頭飾りとする者（シヴァ神）は、長き吉祥のため、生起しますように。

*lalāṭa-catvara-jvalad-dhanañjaya-sphuliṅga-bhā-  
nipīta-pañcasāyakaṃ naman-nilimpa-nāyakam |  
sudhā-mayūkha-lekhayā virājamāna-śekharam  
mahā-kapāli sampade śiro jaṭālam astu naḥ || 6||*

6. 5本の矢を持つ者（*pañcasāyaka*: 愛神カーマ）が[その] 額の祭場（*catvara*）で燃える炎（*dhanañjaya*）の火の粉と輝きに飲み込まれた場所であり、神々の指導者（インドラ）が礼拝する

<sup>22</sup> とくに第3頌で「美しい遊び仲間と[に比される] 山並み」と訳した“*vilāsa-bandhu-bandhura*”については、全く異なる解釈も可能であろう。“*vilāsa*”に“*dalliance*”という訳語を与える Pandeya（1997, 60）に倣って、パールヴァティーとの「戯れによって」と理解することも試みたが、詩文全体の意味とうまく整合させられなかった。

<sup>23</sup> 立川（2008, 228-33）参照。

<sup>24</sup> インド文学上の詩人の約束事（*kavi-samaya*）として、チャコーラという鳥は月光を餌とするものとされているので、「チャコーラ鳥の友」とは月のことになる。

対象である、甘露を光線とする織月によって輝く頭飾りをつけた、頭蓋骨の大きな<sup>25</sup> 結髪する頭が、我々の幸せ (sampad) のためにありますように。

karāla-bhāla-paṭṭikā-dhagad-dhagad-dhagaj-jvalad-  
dhanañjaya-āhutiḥṛta<sup>26</sup>-pracaṇḍa-pañcasāyake |  
dharādharendra-nandinī-kuca-āgra-citra-patraka-  
prakalpana-eka-śilpini trilocane ratir<sup>27</sup> mama || 7||

7. [その] 恐ろしき額の表面で「ダガッド、ダガッド、ダガッド」と燃える炎に、鋭い5本の矢を持つ者（愛神カーマ）が供物として捧げられた者であり、山の王の娘（パールヴァティー妃）の胸の先に色とりどりの彩色を施す唯一人の職人である、三眼の者（trilocana: シヴァ神）に対し、私の熱情がある。

[解説] ここまでに詠われてきたシヴァを飾る諸要素を再び讃嘆するのに加え、第5, 6頌には帝釈天インドラをはじめとする他の神々との関係が説かれる。シヴァ神の足置きが神々の冠から落ちる花卉、花粉によって飾られるという表現は、神々が頭を下げてシヴァの足下に頂礼していることを意味している。

第6, 7頌に説かれるのは、シヴァと愛神カーマとの関係である。『リング・ブラーナ』などに見られるそのエピソードは、シヴァ神の息子のみが魔神ターラカを倒すことができると知った神々が、シヴァ神をパールヴァティーと結婚させるため、カーマにその矢でシヴァを射るように依頼し、カーマはそれを試みるも、シヴァ神の怒りに触れ、額の第三の目から出る光線によって焼かれてしまう、というものである<sup>28</sup>。カーマが持つとされる5本の矢は、五感のそれぞれに基づく5つの欲望（五欲）を象徴しており、そのカーマを焼くシヴァ神の額の第三の目はここでは祭式を行う炉に喩えられている<sup>29</sup>。このエピソードはカーリダーサの『クマーラ・サンバヴァ』第三章の主題でもある<sup>30</sup>。

#### §4 荒ぶる神としてのシヴァ神の諸相

navīna-megha-maṇḍalī-niruddha-durdhara-sphurat-

<sup>25</sup> 「大きな頭蓋骨を[髪飾りとして]付けた」の可能性もある。他の箇所では言及されないが、ツインマー (1988, 219) が述べるように、シヴァは頭蓋骨を髪飾りとする者として描写される場合もある。

<sup>26</sup> STj: ādharīkṛta

<sup>27</sup> STj: matir

<sup>28</sup> 立川他 (1980, 83-4).

<sup>29</sup> Agrawala (1960, 19) が述べるように、シヴァの苦行の熱力が5つの感覚的な欲望を制圧していること、つまり、シヴァが欲望を超越した存在であることを表してもいるであろう。

<sup>30</sup> 立川 (2008, 228-39) にパールヴァティーについて詳しく述べられているが、その中に『クマーラ・サンバヴァ』の梗概もまとめられている。

kuhū-niśīthinī-tamaḥ<sup>31</sup>-prabandha-baddha<sup>32</sup>-kandharah |  
 nilimpanirjharī-dharas tanotu kṛtti-sindhurah  
 kalā-nidhāna-bandhuraḥ śriyaṃ jagad-dhurandharah || 8||

8. とぐろを巻く新しい雲に覆われた、抑えがたく輝く新月の夜の暗闇の連続と結合した〔かのよう  
 に青黒い〕頸を持つ者、神聖な河（ガンガー）を支える者であり、象皮を纏う者であり、〔月の〕  
 欠片の美しい置き場であり、世界という重荷を支える者〔であるシヴァ神〕は、吉祥（富）を恵  
 み給え。

praphulla-nīla-paṅkaja-prapañca-kālīma-prabhā-  
 avalambi-kaṇṭha-kandalī-ruci-prabaddha-kandharam<sup>33</sup> |  
 smaracchidaṃ puracchidaṃ bhavacchidaṃ makhacchidaṃ  
 gajacchidaṃ-andhakachidaṃ tam antakacchidaṃ bhaje || 9||

9. 満開の青い蓮より放散する青黒い輝きを〔したコブラを〕掛ける喉と、カンダリーの〔白い花の〕  
 光と結びついた首を持つ、愛神（カーマ＝スマラ）を滅ぼす者であり、〔魔神ターラカ三兄弟の〕  
 都城を滅ぼす者であり、生（再生）を断ち切るものであり、〔ダクシャの〕祭式を破壊する者で  
 あり、象の姿をした魔神（ガジャ・アスラ）を滅ぼす者であり、魔神アンダカを滅ぼす者であり、  
 死神（アンタカ）を滅ぼす者である彼（シヴァ神）に、私は礼拝いたします。

akharva<sup>34</sup>-sarvamaṅgalā-kalā-kadamba-mañjarī-  
 rasa-pravāha-mādhurī-vijṛmbhaṇā-madhu-vratam |  
 smarāntakaṃ purāntakaṃ bhavāntakaṃ makhāntakaṃ  
 gajāntakaṃ-andhakāntakaṃ tam antakāntakaṃ bhaje || 10||

10. カダンバの花房の精髓の流れである蜜を湛えて開く花のような一切の吉祥を備えた者  
 （sarvamaṅgalā: パールヴァティー）の全ての支肢に〔とまる〕蜂（madhuvrata）であり、愛神  
 （カーマ＝スマラ）を滅ぼす者であり、〔魔神ターラカの三人の息子の〕都城を滅ぼす者であり、  
 生（再生）を断ち切るものであり、〔ダクシャの〕祭式を破壊する者であり、象の姿をした魔神  
 （ガジャ・アスラ）を滅ぼす者であり、魔神アンダカを滅ぼす者であり、死神（アンタカ）を滅ぼ  
 す者である彼（シヴァ神）に、私は礼拝いたします。

〔解説〕第 8 頌 ab、第 9 頌 ab に描かれているのは、シヴァ神の首とそこに掛かったコブラが、  
 青黒くそして白く輝く様子であると思われる。新月の夜の暗闇および青蓮は青黒さを、カイラー  
 サ山を取り巻く雲およびカンダリーの花は白さ<sup>35</sup>を表している。一転して第 10 頌 ab では、黄色  
 をイメージさせるカダンバの花と蜂という喩えでパールヴァティー妃とシヴァ神とを描いてい

<sup>31</sup> STp は tamaḥ をそれ以下に続く複合語ととっていないが、STj より修正する。

<sup>32</sup> STj: bandhu

<sup>33</sup> STj 9ab: praphulla-nīla-paṅkaja-prapañca-kālīmac-chaṭā-ṣṭambi-kaṇṭha-kandharā-ruci-prabandha-kandharam |

<sup>34</sup> STj: agarva

<sup>35</sup> カンダリーは雨後に一斉に白い花を咲かせる薬草として知られている。

る。先の第4頌などでもそうであったが、あざやかな色彩感覚がこのストートラの表現上の特徴となっている。

第9頌 cd、第10頌 cd で同じ音を繰り返して表現されるのは、様々なプラーナなどで語られるシヴァの「敵を滅ぼす相」(saṃhāra-mūrti) に関するよく知られた7つの神話である<sup>36</sup>。愛神カーマ(smara)を焼いたエピソードは既に第6, 7頌で言及されていた。カーマがシヴァ神を愛の矢で射るのはその子に魔神ターラカを倒させるためであったが、ターラカの3人の息子の3つの都城(pura)を滅ぼすのはシヴァ神である。このエピソードはエローラ第16篇などにおいても浮彫が見られる<sup>37</sup>。

次の「bhava(存在)を断ち切る者」とは、すなわち一切を死滅へと導く「時間」(kāla)、マハーカーラとしてのシヴァ神の相<sup>38</sup>であり、カーラ・ヴァイラヴァ(黒き忿怒尊)として仏教の国ネパールにおいても広く信仰を集めている。<sup>39</sup>。なお、「存在を断ち切る者」とは、再生して輪廻の世界に戻ることを終わらせる、すなわち「解脱へと導く者」をも意味している<sup>40</sup>。

ダクシャの祭式(makha)を破壊する者としてのシヴァの神話は、ヴェーダの規定する祭式の神と新興のヒンドゥー神格としてのシヴァとの相克を示すものであろう。妃サティの父ダクシャは、シヴァ神との結婚を反対し、祭式にシヴァを招かなかった。これに抗議したサティは祭火に身を投げて死んでしまう。これに怒ったシヴァはダクシャの祭式を破壊するのである<sup>41</sup>。

次に、第4頌、第8頌でも言及されるニーラという名の象(gaja)の姿をした魔神(ガジャ・アスラ)を滅ぼす者としてのシヴァがここでも言及されている。このニーラを滅ぼすエピソードは、『ヴァラーハ・プラーナ』では、続いて言及される魔神アンダカの物語の一場面として語られている<sup>42</sup>。

魔神アンダカ(andhaka)の物語にはいくつかのバージョンがあるが、パールヴァティー妃が戯れにシヴァ神を目隠した時の発汗から生じたシヴァ夫婦の鬼子である<sup>43</sup>としているものもあり、そこでは目隠しによって生まれたことから「盲目の者」を意味する「アンダカ」という名であるという説明がなされる。シヴァ夫婦の子供であるにも関わらず、悪魔ヒラニヤネートラに育てられたアンダカは母パールヴァティーに懸想してシヴァと戦うことになる。このエピソードに

<sup>36</sup> 立川(2008, 189)が指摘するように、シヴァの踊る姿はこの「敵を滅ぼす相」と関連している。なお、ライプツィヒ大のSadananda氏によると、現代インドでは一般にこのストートラの朗唱にはライバルに打ち勝つという効能があると考えられているとのことである。この一節の内容によるものと思われる。

<sup>37</sup> 立川他(1980, 87-8)。

<sup>38</sup> 直接bhavāntakaとしてのシヴァを説明したものではないが、カーラ(時間)としてのシヴァについてはツインマー(1988, 206)、立川・大村(2002, 86)も言及している。

<sup>39</sup> カトマンドウの旧王宮(ダルパール)広場の17世紀のカーラ・バイラヴァ像がよく知られている。シヴァの畏怖相としてのバイラヴァについては、立川・大村(2002, 105-26)および立川(2008, 206-11)参照。

<sup>40</sup> Agrawala(1960, 19)。

<sup>41</sup> 立川他(1980, 90-2; 128-30)、立川(2008, 240-1)。

<sup>42</sup> 立川他(1980, 84-6)。

<sup>43</sup> 立川(2008, 184)。



は父との対立が語られる、いわゆるエディプス神話的な性格が見られるが、アンダカは父シヴァに滅ぼされることによって平安を得るのである<sup>44</sup>。

最後に言及される死神（*antaka*）を滅ぼす者としてのシヴァは、ヤマーンタカ（閻魔を滅ぼす者）、カーラアリ（時間を敵とする者）とも呼ばれる。死神に寿命を16年と定められた少年マーulkandeeyaを助けるシヴァ神のこのエピソードは、リングに祈る少年とそこから躍り出て死神ヤマを討つ姿でしばしば図像化されている<sup>45</sup>。

## §5 シヴァ神のターンダヴァ舞踊

jayatv adabhra-vibhrama-bhramad-bhujāṅgama-śvasad<sup>46</sup>-  
vinirgamat-krama-sphurat-karāla-bhāla-havyavāt<sup>47</sup> |  
dhimid-dhimid-dhimid-dhvanan-mṛdaṅga-tuṅga-maṅgala-  
dhvani-krama-pravartita-pracaṇḍa-tāṇḍavaḥ śivaḥ || 11||

11. 多くのとぐろを巻くコブラが、呼吸し、這い出し、順にくねる、恐ろしき額に、供物を保つ〔炉のごとき第三の目〕を有する者であり、「ディミッド、ディミッド、ディミッド」と鳴るムリダンが太鼓の、大きく吉祥なる音の連なりにかき立てられた猛々しい舞踊（*tāṇḍava*）をなす、シヴァ神に勝利あれ。

〔解説〕第1頌とともにタイトルにあるターンダヴァ舞踊に直接言及する頌である。舞踊の王（*naṭa-rāja*）の異名を持つシヴァ神はいくつものダンスを踊る<sup>48</sup>が、ここまで繰り返して言及された象の姿をした悪魔ニーラを滅ぼした後、その骸の上で踊る激しいダンスが特に「ターンダヴァ」と呼ばれる<sup>49</sup>。象の皮を大きく広げて被り、象の頭の上で踊るこの忿怒相のダンスもひろく彫刻の題材とされ、インド各地に多くの作例が知られている<sup>50</sup>。

<sup>44</sup> O'Flaherty (1983, 35-6)

<sup>45</sup> 立川他 (1980, 86-7).

<sup>46</sup> STj: sphurad

<sup>47</sup> STj 11b: dhagad-dhagad-vinirgamat-karāla-bhāla-havyavāt |

<sup>48</sup> 立川他 (1980, 104-7). また、詳しくは Rao (1968, 221-270).

<sup>49</sup> ツインマー (1988, 225-9) が詳細に論じている。立川他 (1980, 106) に述べられるように他の忿怒相での舞踊もターンダヴァと考えることができるが、「象の姿をした魔神を滅ぼす相」が、特に繰り返して言及されることから、このストートラ中では象の姿をした魔神の骸の上で踊るこのダンスがターンダヴァとしてイメージされているのではないかとと思われる。なお、船津 (2007: 119-20) によれば、「ターンダヴァ」という語は、シヴァ神の眷属の頭である「タンドウ仙に由来する」を語源としており、広義には舞踊の総称であるが、狭義には優美で官能的な女舞ラーシヤ (*lāsya*) に対する対概念として、荒々しいステップを特徴とする男舞を意味しており、現代のインド舞踊でも用いられるテクニカルタームである。インドの演劇への舞踊の導入について語る、シヴァ神を中心とする起源神話についても同論文を参照されたい。

<sup>50</sup> ツインマー (1988, 図39, 40)、立川 (2008, 図6.17; 18; 20) など参照。

## §6 詠い手の問いかけ

dr̥ṣad-vicitra-talpayor bhujaṅga-mauktika-srajor  
 gariṣṭha-ratna-loṣṭhayoḥ<sup>51</sup> suhr̥d-vipakṣa-pakṣayoḥ |  
 tṛṇa-āravinda-cakṣuṣoḥ prajāmahī-mahendrayoḥ  
 samapravṛttikaḥ kadā sadāśivaṃ bhajāmy aham || 12||<sup>52</sup>

12. 岩でできた極彩色の寝台を持ち、コブラの珠の首飾りを付け、至高なる宝の塊を持ち、友にも敵にも味方となり、草のように〔切れ長で〕蓮のように〔輝く〕目を持つ生類の王と王妃（prajāmahī-mahendra: シヴァ神とパールヴァティー妃）と同じ〔帰依の心を〕起こしている私は、いつシヴァ神の永遠相（sadāśiva）を礼拝できるでしょうか？

kadā nilimpanirjharī-nikuṅja-koṭare vasan  
 vimukta-durmatih sadā śiraḥ-satham añjaliṃ vahan |  
 vilola<sup>53</sup>-lola-locano<sup>54</sup> lālāma-bhāla-lagnakaḥ  
 śiva-īti mantram uccaran kadā sukhī bhavāmy aham || 13||

13. 神聖な河（ガンガー）の木陰の洞に住み、悪しき考えを離れ、常に頭の上に合掌の手を置き、きょうつくことなく、飾りのついた額を持つ〔シヴァ神〕に献信し、「シヴァよ」というマントラを唱えている私は、いったいいつ幸せを備えた者となるのでしょうか？

〔解説〕このストローラでは、詠い手である「私」が一人称でたびたび言及されている。ここの両頌でも、「私」が永遠のシヴァの姿<sup>55</sup>に礼拝し、樂を備えた者（解脱した者）となるのは「いつか？」と詠われているが、詠い手である「私」ことラーヴァナが千年間も歌い続けたという舞台設定を想起するとき、この両頌の「いつ」の持つ文学的効果は大きいように思われる。

シヴァ神のバクタ（献信者）としてのラーヴァナのイメージは重要であり、カーリダーサの『ラグヴァンシャ』12.89やバーナの『カーデンバリー』冒頭の吉祥祈願文第2偈などといった有名な文学作品でも言及されている<sup>56</sup>。『ラーマーヤナ』というヴィシュヌ信仰系の物語の敵役の中心人物が、熱心なシヴァのバクタである、という形で二つの信仰伝統の関連が見られるのは興味深い。

なお、第12頌に関しては、Agrawala（1960, 20）のように、岩の寝床と豪華な寝台、蛇の首飾りと真珠のネックレス、宝の山と土塊、友と敵、草のような眼と蓮のような眼、という

<sup>51</sup> loṣṭhayoḥをSTjにより修正。

<sup>52</sup> STj 12d: samam pravartayan-maṇaḥ kadā sadāśivaṃ bhaje ||

<sup>53</sup> STj: vimukta

<sup>54</sup> STj: locanā

<sup>55</sup> 立川他（1980, 107; 図116）に述べられる、Maheśaとも呼ばれ三面で表現されるシヴァの相は、エレファント島の巨大な彫像が特に有名であるが、半身を現しまさに世界に顕現しつつあるその姿は、Srinivasan（1990, 109; 140）の考察に基づくなら、厳密にはSadāśivaという相であると思われる。エレファント島の像についてはO'Flaherty（1983, 37-8）も参照されたい。

<sup>56</sup> Sivaramamurti（1951, 130-2）。

二項対立を越え、それらを同一のものと見る私、というように解釈することもでき、その場合この頌はシヴァ神とパールヴァティー妃を同一のものと見ること、つまり「両性具有の相」(ardhanārīśvara-mūrti) を取るシヴァについて詠ったものということになるであろう<sup>57</sup>。

#### §7 読誦の効能 (phalaśruti)

imaṃ hi nityam evam-uktam uttama-uttamaṃ stavam  
paṭhan smaran bruvan naro viśuddhim eti santatam |  
hare gurau subhaktim āśu yāti nā-ānyathā gatim  
vimohanaṃ hi dehināṃ suśaṅkarasya cintanam || 14||

14. このように説かれた最上なるこの讃辞を、常に読み上げ、記憶し、唱える人は永遠なる清浄性に赴く。ハラ（シヴァ神）という師に対する良き信仰に速やかに至るのである。別の方法では〔そこに〕行くことはない。人々にとって、よきシャンカラ（シヴァ神）に対する念想 (cintana)こそが、妄念を離れること<sup>58</sup>なのだから。

pūjā-avasāna-samaye daśavaktra-gītam  
yaḥ śaṃbhu-pūjana-param<sup>59</sup> paṭhati pradoṣe |  
tasya sthirāṃ ratha-gajendra-turaṅga-yuktāṃ  
lakṣmīm sadā-eva sumukhīm pradadāti śaṃbhuḥ || 15||

15. 供養の終わりに際して、十の口を有する者 (daśavaktra: ラーヴァナ) によって歌われた、シャンブ（シヴァ神）の供養のうちの最高のもの（であるこの讃歌）を、宵に唱える者、その者には、車駕、象、馬を備えた堅固なる富を、シャンブは、喜んで与える。

iti śrī-rāvaṇa-kṛtam<sup>60</sup> śiva-tāṇḍava-stotraṃ sampūrṇam |  
以上、ラーヴァナ作『シヴァターナダヴァ・ストートラ』、了。

〔解説〕最後にこのストートラを唱えることの功德が説かれる。いわゆる “phalaśruti”、効能書である。最後の第 15 頌のみは、これまでの同一リズムの反復による力強い響きの韻律とは異なり、半頌 14 音節からなる Vasantatilakā という優美な韻律からなっており、リズムの面では全く違った印象を与えるエンディングとなっている。

<sup>57</sup> この相をめぐるエピソードについては立川他（1980, 99-100）を参照のこと。

<sup>58</sup> “vimohana”は辞書的には、confusion, perplexity あるいは seducing, fascinating との訳語が与えられるので、「シヴァ神は人々の混乱を心配 (cintana) されているから」「シヴァ神は人々を魅了しようと心がけていらっしゃるから」などと理解することもできるかと思われるが、Pandey（1997, 69）の翻訳を参照し、「妄念を離れること」ととって和訳しておく。

<sup>59</sup> STj: pūjanam idaṃ

<sup>60</sup> STj: viracitaṃ

## Bibliography

## 略号

STj *Śivatāṇḍavastotra*: Javaji (1912, 112-4).

STp *Śivatāṇḍavastotra*: Pandey (1997, 58-70).

## 文献

Agrawala, Vasudeva S.

1960 "The Śivatāṇḍava Stotra of Rāvaṇa," *Journal of the Oriental Institute, Baroda* 10.1: 18-21.

Berkson, Carmel, George Michell and Wendy Doniger O'Flaherty

1983 *Elephanta: the Cave of Shiva*, Princeton University Press: Princeton.

Giteau, Madeleine

1967-68 "Two Tenth Century Bas-Reliefs Depicting the Rāvaṇānugrahaṃūrti," *The Adyar Library Bulletin* 31-31: 593-599.

Gonda, Jan

1977 *Medieval Religious Literature in Sanskrit (A History of Indian Literature II-1)*, Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

Javaji, Tukaram

1912 (ed.) *Bṛhatstotraratnākaraḥ*: 182 *stotrasaṃkhyā*, Bombay: Nirṇaya Sagar Press.

Kala, Jayantika

1988 *Epic Scenes in Indian Plastic Art*, New Delhi: Abhinav Publications.

Mudholakara, Shastri S.K.

1990 (ed.) *Rāmāyaṇa of Vālmīki*, vol. vii (*Uttarakanda*), with the Commentary (*Tilakā/Rāmāyaṇaśiromaṇi/Bhūṣana*), Delhi: Parimal Publications.

Music Today

1992 *Bhaktimālā*, New Delhi: Living Media Ltd.

O'Flaherty, Wendy Doniger

1983 "The Myths depicted at Elephanta," in Berkson et. al (1983, 27-39).

Pandey, Ramesh Kumar

1997 *Kalpalatā: A Collection of Devotional Poems*, New Delhi: Sanskrit Sanskriti Pratishthanam.

Paṇṣīkar, Wāsudev Laxman Śāstri

1940 (ed.) *The Rāmāyaṇa of Vālmīki, with the Commentary (Tilakā) of Rāma* (4th edn.), Bombay: Nirṇaya Sagar Press.

Rao, T. A. Gopinatha

1968 *Elements of Hindu Iconography*, New York: Paragon Book Reprint Corp.

Shah, U.P.

1975 *The Vālmīki-Rāmāyaṇa: the Uttarakāṇḍa, The Seventh Book of the Vālmīki-Rāmāyaṇa*, Baroda: Oriental Institute.

Shastri, Hari Prasad

1959 (ed.) *The Rāmāyaṇa of Vālmīki, vol.III (Yuddhakanda&Uttarakanda)*, London: Shanti Sadan.

Sivaramamurti, C.

1951 "Ravana in the Kailāsa Temple at Ellora," *Journal of the Ganganatha Jha Research Institute* 8.2: 129-134.

Srinivasan, Doris Meth

1990 "From Transcendancy to Materiality: Para Śiva, Sadāśiva, and Maheśa in Indian Art," *Artibus Asiae* 50.1: 108-142.

## 岩本裕 (訳)

1980 ヴァールミーキ『ラーマヤナ』東洋文庫376、平凡社。

立川武蔵

2008 『ヒンドゥー神話の神々』 せりか書房。

立川武蔵、石黒淳、菱田邦夫、島岩

1980 『ヒンドゥーの神々』 せりか書房。

立川武蔵、大村次郷

2000 『アジャンタとエローラー インドデカン高原の岩窟寺院と壁画―』 集英社。

2002 『シヴァと女神たち』 山川出版社。

ツインマー、ハインリッヒ (宮元啓一 訳)

1988 『インド・アート：神話と象徴』 せりか書房。

船津和幸

2007 「『演戯の鏡』 (*Abhinayadarpaṇa*) 翻訳ノート (1)」『信州大学人文学部人文科学論集』〈文化コミュニケーション学科編〉41: 105-126。

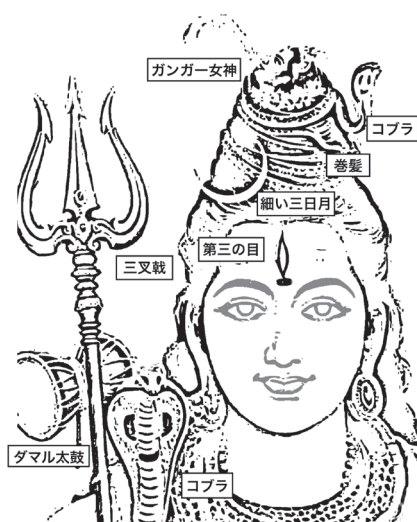


図版1 エローラー第29窟 撮影：佐久間留理子 (2007.2.5)





図版2 パンテアイ・スレイ南経蔵破風 撮影：前川実保（2009.12.15）



図版3 シヴァ神の容姿と持物



**Abstract**An Annotated Japanese Translation of the *Śivatāṇḍava-stotra*

Toshiya UNEBE

*Śivatāṇḍava-stotra* is a Sanskrit hymn of praise to the Lord Śiva in the Hindu religious tradition. It has been very popular in India and is famous for its high literary grace. And it is traditionally ascribed to Rāvaṇa, the rival of Rāma who is the hero of one of the two celebrated Indian epics, *Rāmāyaṇa*.

This article presents a Japanese translation of this hymn with annotation. The *Rāmāyaṇa* (chapter 7, section 16) narrates the account of how Rāvaṇa became a devotee (*bhakta*) of Śiva and how he came to sing the hymn to him. This episode is also translated in this article.

The hymn describes many *mūrti* (forms) of Śiva related to his various mythological episodes. The annotation explains these related episodes and the visual representations as well.